

かるたのルーツは？

毎年1月に競技かるたの日本一を決める名人位・クイーン位決定戦が開催されたり、お正月の家族団らんの1コマとしてかるた遊びをしたりすることから、「かるた」は冬の季語になっています。かるたがお正月の遊びとして定着したのは、江戸時代中期といわれています。

このかるた遊びのルーツは、平安時代の「貝覆い」という遊びにさかのぼります。二枚貝の一片を持って、もう一片を探し当てるものです。後に、貝の内側に絵や和歌が描かれ、「貝合わせ」と呼ばれるようになりました。

室町時代には、ポルトガルから伝わったカードゲームをまねて紙になりました。「かるた」はポルトガル語の「CARTA（カード）」の音を日本語にしたものです。江戸時代には、ほぼ現在の百人一首かるたの形になったと考えられています。

明治時代に活躍した小説家、尾崎紅葉の『金色夜叉』や夏目漱石の『こころ』の中に、主人公がかるた会でかるたを取る様子が描かれています。明治37（1904）年には、ジャーナリストの黒岩涙香が「東京かるた会」を創設し、2月11日に第1回かるた大会を開催しました。その時に統一されたルールが、現在の競技かるたの始まりとされています。

小野田高等学校小倉百人一首かるた部顧問 青池のぞみ